

「シナイ半島の調査地にて思うこと」

川床 睦夫

「昔は食べるものが少なかったので、みな元気に暮らしていた。しかし、今は食べ物が豊富になったので病人が多くなった。」シナイ半島のベドウィン・サワールハ族のサーリム・マンズール族長は語った。

同族長が住んでいるワーディー・フィーラーンは南シナイで最も肥沃なワーディーで、果樹園にはナツメヤシ、オリーブ、ブドウ、ザクロなどが生い茂り、農園ではタマネギ、ニンニクなどの野菜類が栽培されている。かれらはここでヤギ・ヒツジ類を飼育し、周辺のワーディーでラクダ放牧を行っている。

ベドウィンたちはここで、シナイ山（聖カタリーナ）修道院および付属財産の保護、ラクダ、ヤギ・ヒツジの遊牧、ラクダによる輸送業、果樹・野菜栽培、鉱業、漁業、製炭業など複数の生業を持って生きてきた。中でも、修道院と修道士が所有する建造物、果樹園などの財産を襲撃しないこと、あるいは実際にガードするという保護に対して支払われる保護料と修道院と諸都市間を修道士、巡礼者、訪問者、物資を乗せて運ぶ運賃・輸送賃が最も重要な現金収入の途であった。そして、この限られた収入源が族長と長老会議に掌握されることによって部族連帯意識は高揚し、伝統的文化が継承された。

1967年、イスラエルはシナイ半島を占領すると、直ぐに幹線道路を建設した。1982年、エジプトに返還されると、道路網建設、油田開発、大規模な観光開発が実施された。この動きは輸送業の担い手をタクシーとトラックの運転手に変えた。ヒトとモノが瞬時に、かつ多量にシナイ半島に流入し、様々な情報と文化が入ってきた。ベドウィンの移動も容易となり、収入源と生業の場も多様化した。

かれらは、族長と長老会議への相談・了承なしに移動し、収入を得るようになった。そして、急速にベドウィン社会と文化が変化した。1985年以來20年間、毎年夏と冬を併せて3～5ヶ月をシナイ半島に過ごして、近年の変化の激しさに驚いている。

ベドウィンのハレの食の作法は、マンサフなどの大皿を数人が右立膝座りで囲み、年長者が先ず手を付ける。すばやく少量を食べて座を立たなくてはならない。胃を圧迫して満腹感を味わい、次のグルー

プに残った食事を廻すのである。少ない食料を多くの人々が共食するための作法が一般的な食の作法となったのである。日本ではパーティーに列席できない随行者には弁当が供されるが、時間差はあっても、同じ暖かい料理を下働きの末端まで共有できるアラブの食の方が民主的であるという意見もある。

このような作法も料理も急速に失われつつある。族長に食事に誘われ、並ぶ料理を見ると、トマトソース煮の皿が目立つようになった。食の画一化は進み、古文書に現れる食材から想定できる料理の世界は忘れられてしまった。挽き割り小麦を粥のように煮込んでサムヌをかけたグシーシャや硬くなったパンをヤギの乳で捏ねたムラツガゲーヤを50歳代以下で知る者はほとんどいない。

1980年代後半に、「われわれはエジプト人ではない、ベドウィンである」と誇らしげに語っていたシナイ半島のベドウィンたちの生活もエジプト化し、今や「エジプトはひとつ」になりつつある。

国際化、グローバル化が叫ばれ、民主主義を中近東に根付かせることが正義であるというアメリカの主張が公然と提示される中で、テレビ、インターネットなどを通じてアメリカ化が進んでいる。

言うまでもなく、国際化、グローバル化の前提条件は異なる文化、価値観、主義主張の尊重である。尊重の上に立脚する理解が求められるのである。一元化ではなく、多様の重要性を認識することが必要なのである。多様な言語、文化、思想、価値観の存在意義、衝突とその解決、開発と自然・文化破壊、共生の意味を研究する者の役割が問われている。

（かわとこ むつお 中近東文化センター）



結婚式のパーティーでコーヒーを振舞う場面